

3. 石器 (第21圖~第31圖, 第4表~第9表, 圖版6·7)

総数1,158点を数える。第5表は本遺跡で使用された石材の一覧表である。調査区各層出土の石器の統計であり、遺跡全体を把握し得るものではないが、大方の動向を把握することは可能であろうと考ふられる。

使用された石材は、安山岩が最も多く、全体の46.98%を占める。これに次いで輝石安山岩が24.26%、黒曜石が14.77%を占め、3つの石材に対する依存度は86.01%となり極めて高いことが知れる。

第6表から第9表は、1つの石材が各層においてどのように使われたのか、を示す一覧表である。これを見ると、黒曜石、安山岩の各種石器への利用率が高く、それ以外の石材は一定の器種にしか利用されていないことが分かる。例えば、滑石は総数14個、1.21%を占め、原石もしくは小片として存在する。これは滑石混入の土器が往時作製されたことを想像すればその原材料として他所から将来されたことを示唆するものであり、石材自身の属性によっているのである。また、砂岩は石鍬としての利用も認められるが、その多くは燧石として存在し、特に骨角器等の調整・仕上げに利用されたものであろうと考えられる。総数27個、2.33%を占める。燧石安山岩は総数281個で全体の24.26%を占め、器種は別表に示す通りである。原石や打ち割れ痕を認める例が多く、石器としての利用は疑問視されたが、その出土多く、かつ全体的に丸みを帯びるものが持ち込まれているため、投掷的なものの使用或いはそれ以外の機能を想定して石器と認定し、取り上げることとした。

第4表は、各調査区における道路全件での組成費である。形器の検出は1点もなかった。

以下、各調査区出土石器の説明を行うが、時間的制約があり、B・C・D区の石器群を掲載し得たのみであった。

第4章 A~E区石炭相成一氧化

第5表 石材別一覧表

調査区	石材 種類	黒曜石	安山岩	輝石 安山岩	砂岩	結晶岩	蛇紋岩	滑石	石英	軽石	不明	計 %
A	I	6	29	25		1	3	1				65
		9.3	44.6	38.5		1.5	4.6	1.5				100
	II	1	5	1								7
		14.2	71.4	14.3								100
B	III	4	16	25	2	1	1	1			1	51
		7.8	31.3	49.0	3.9	2.0	2.0	2.0			2.0	100
	IV	11	30	20	1		1				1	61
		17.2	46.9	31.2	1.56		1.56				1.56	99.9
	V	4	19	4		1	1			1		30
		13.4	63.3	13.4		3.3	5.3			3.3		100
	VI	51	149	29	6	10	11	5	1	5		267
		19.1	55.8	16.8	2.2	3.7	4.1	1.87	0.56	1.87		100
C	I	15	15	1			5				1	37
		40.5	40.5	2.7			13.6				2.7	100
	II	9	31	20	5	4	8			1	1	79
		11.4	39.2	25.3	6.3	5.1	10.1			1.3	1.3	100
	III	19	7	3			2	1		2		34
		55.9	20.6	8.8		5.9	2.9			5.9		100
	IV	2	26	18	1	1			1			43
		4.6	46.5	41.8	2.35	2.36			2.36			99.9
D	I	19	47	22	4	9	4	1	1		3	110
		19.0	42.4	19.8	3.6	8.1	3.6	0.9	0.9		2.7	100
	II	35	122	83	2	7	11	2		5	2	269
		13.0	45.4	30.9	0.7	2.6	4.1	0.7		1.9	0.7	100
	III	1	8	2	2	2		2				17
		5.8	47.0	11.8	11.5	11.8		11.8				100
	Pit	1	3	4		1	1		1			11
		9.1	27.3	36.3		9.1	9.1		9.1			100
E	III	12	31	21	1	5	1	1		2		74
		16.3	41.9	28.4	1.3	6.5	1.3	1.3		2.7		100
	合計	171	544	281	27	42	50	14	4	17	8	1.158
		14.77	46.98	24.26	2.33	3.62	4.32	1.21	0.35	1.47	0.59	100

第6表 A-E区石器器種別一覽表

第7章 B区石器制作一

圖 6 索引 C 区石器考別一覽表

第3表 D区石器種類別一覽表

● B区V層出土石器 (第21図、図版6)

V層より出土した資料で、石鉈、石鎌、石錐、搔器、石鍤、多目的礫石器などがある。

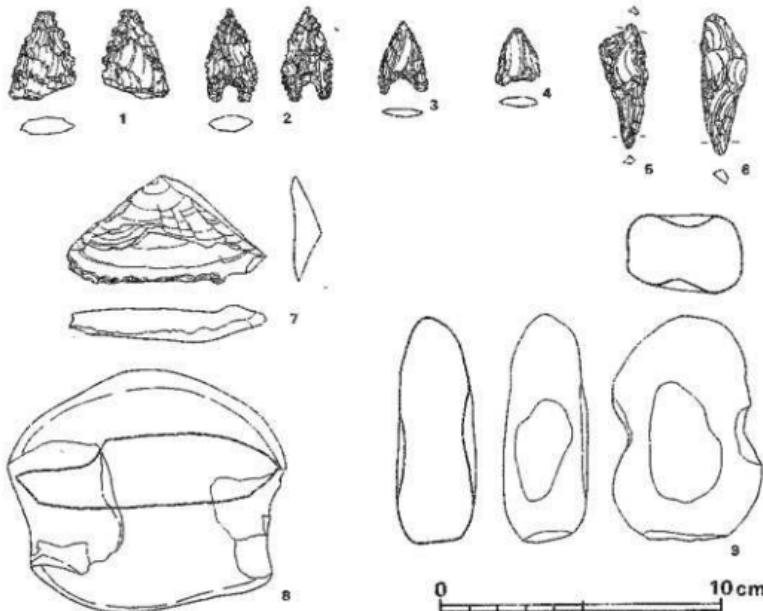
石鉈(1) 良質の黒曜石で、やや分厚い横広の剝片を素材としている。右縁のみを鋸齒状に作り出している。先端、基部を折損する大形のものである。重量4.5gを測る。

石鎌(2~4) 2は黒曜石製で、3・4は安山岩製である。2は縱長の剝片を使用しており僅かに先端に向かって湾曲する。素材面が認められないほどに調整剝離を行う。両縁は鋸齒状をなす。抉りは深く入れている。全体的に風化している。2.3gを計る。3は片面に素材面を残し、4は周縁のみ調整する。4は基部を少し抉り込んでいる。3は1g、4は1.05gを計る。

石錐(5・6) 5は良質の黒曜石を素材とし、全面に調整を施す。上下に錐部を作出している。6も5とほぼ同様の形状、調整を示し、先端に錐部を作出。使用のためか稜部が少し潰れている。安山岩製である。

搔器(7) 安山岩製の横広の剝片を使用し、両面より刃部を作出する。

石鍤(8) 輝石安山岩の鋸平な砾を使用し、短辺両縁に画面より剝離して凹部を作り出す。重量は290gを計る。



第21図 B区V層出土石器(1/2)

多目的砾石器(9) 適当な名称がないためこのように呼んでおく。石質は輝石安山岩かと思われるもので、長辺には各々抉りをもち、また短辺部には叩石と同様の潰れが認められる。また、正・背面には凹石のような凹みが見られる。用途については以上の3種が考えられるがどれが主体をなすものか分からぬ。重量は170gを計る。

● C区I層出土石器 (第22図、図版6)

使用痕のある剝片、石核、搔器、石斧未製品、叩石などがある。

搔器(10) 安山岩剝片を素材としたもので、打瘤を除去し刃部を作出する。刃部は左右に隣接する面を折断する際に切られている。何枚に刃部を狭くする、或いは不要としたのか不明である。このように折断面をもつ例は他にも存在する。この折断面は彫刀面を作出するためのものではない。

使用痕のある剝片(11・13) 11は打面を残す縦長剝片で良質の黒曜石を素材としている。両側縁に微細な刃こぼれが認められる。13は安山岩製の横広の大形剝片で、打面を僅かに残す。

石核(12) 安山岩を素材としたもので、打面は線状をなす。4枚の剝離面が認められ、剝離後下縁を折断する。

石斧および未製品(14・15) 14は荒削りを経て荒縫の調整に入った資料である。頭部位が折損したため捨棄したものであろう。左縁には原石面を残し、滑沢がある。重量は715gを計る。15は、荒削り、細調整を経て製品化されたものと思われ、一部に研磨痕を残す。乳棒状をなすもので、刃部を折損している。重量は565gを計る。共に石質は蛇紋岩である。

叩石(16) 蛇紋岩円礫を使用したもので、広い斜打面を残す。後に半削されている。

● C区II層出土石器 (第23図、図版6)

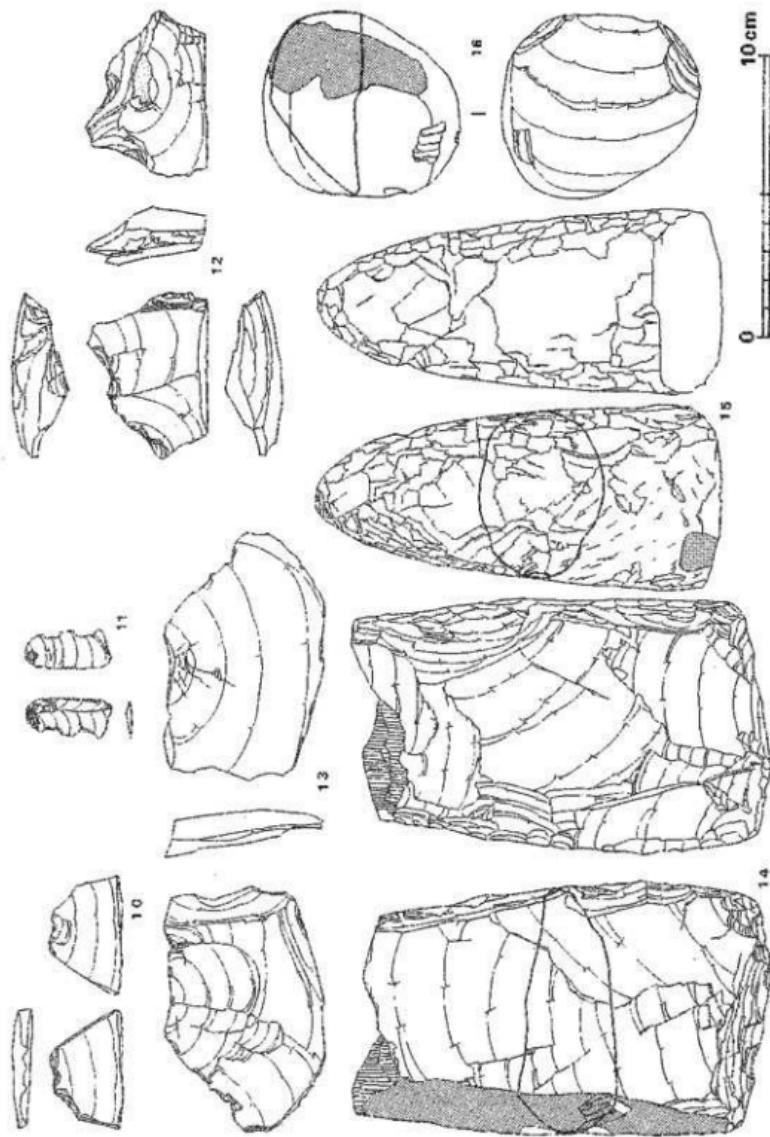
搔器、石錐、剝片、叩石、円盤状石製品、石核、磨片などを出土している。

搔器(17~20) 17は横広の剝片を素材とし、下縁に刃部を背面のみから作出す。打面部は折断によって除去されている。18は打面部に自然面を留める剝片を素材としている。右~下縁にかけて背面より剝離を行い刃部を作る。下縁は意図的であろうか、抉り込むように刃部を作る。また背面打瘤部は数回の加撲により除去されている。19も打面部に自然面を残す。刃部を2か所作り出している。背面には石灰分が付着する。以上は安山岩を素材としているやや大形の搔器である。20は良質の黒曜石を素材としている。剝出された剝片を斜位に利用して刃部を作る。刃部は正面からの剝離によっている。また、刃部と対をなす先端部は錐部を作出している。搔器と錐の機能を併せ持っている。表面には擦痕を僅かに留めている。

石錐(20・21) 20は上記した。21は安山岩の大きな剝片を利用したもので、打面は折断により除去されている。本来はもう少し幅広の剝片で左側を折断している。その折断面を利用して両縁を調整し、錐部を作出する。

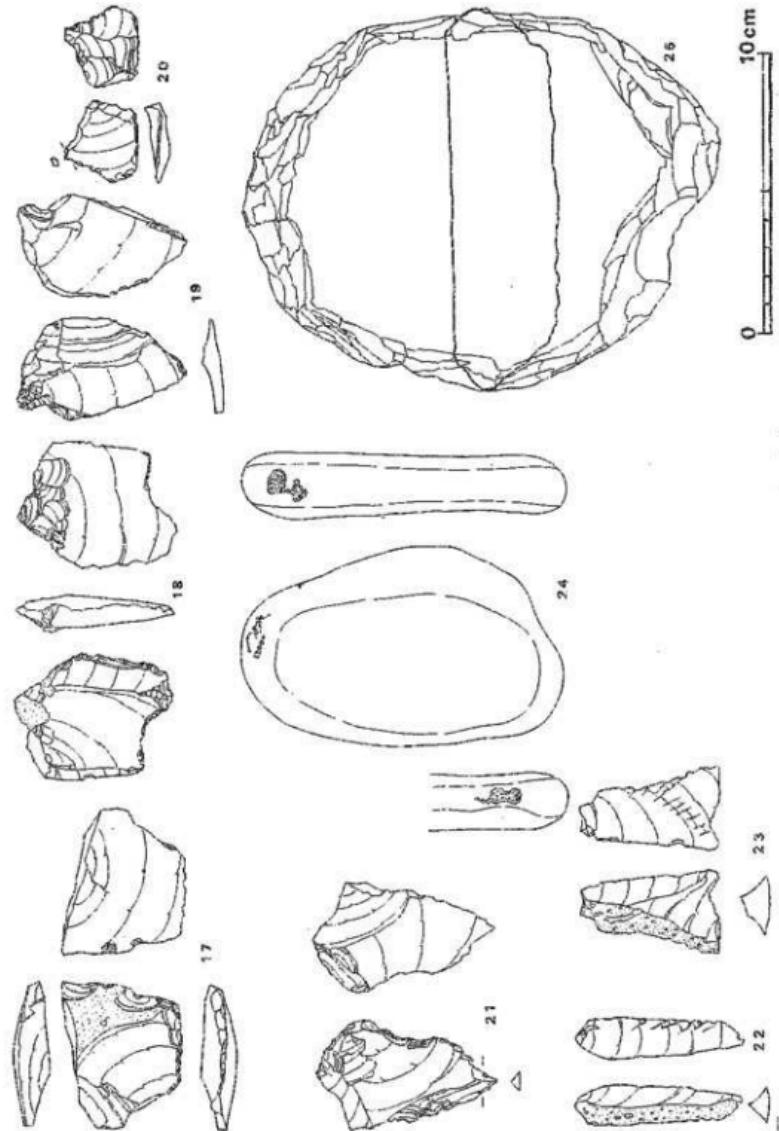
剝片(22・23) 共に安山岩製の剝片である。23は自然面を残すもので、角縁に近い石核から剝出されたものである。約6cmを測り、断面三角形を呈する。23も同様の石核から剝出され

第22圖 C區I層出土石器(1 / 2)



10cm
0

第23图 C区刀磨出土石器(1/2)



たもので、大きく自然面を留める。この石核は打面を上下にもつもので、剝片の剝離痕が示している。

叩石(24) 蛇紋岩の扁平な礫を使用しており、敲打痕が認められる。310gを計る。

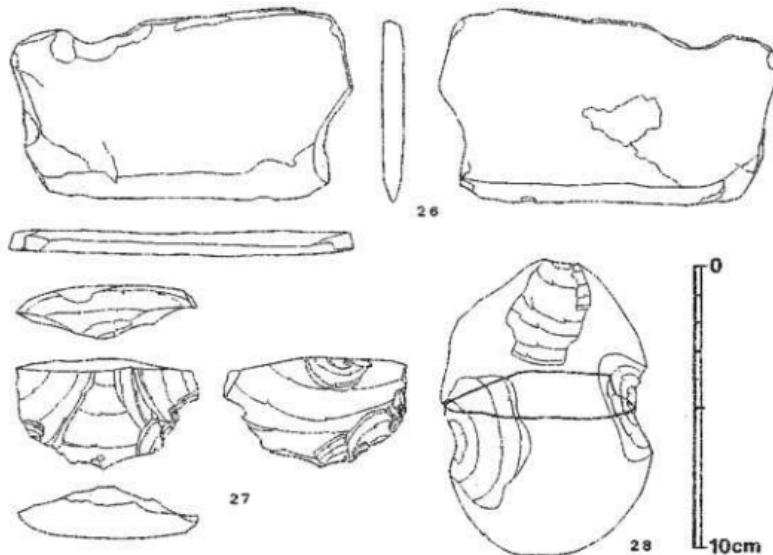
円盤状石製品(25) 灰緑色を呈す結晶片岩である。周縁を丸く加工するもので、上面は平坦面をなし、下面は凹凸を有している。用途不明の石器であるが、大きさからすると土器の製作台には手頃であろう。重量は1.380gと重い。

● C区III層出土石器(第24図、図版6)

30点程度の出土があったが、黒曜石は1点も検出されなかった。石核、石錐、石庵丁形石器使用痕のある剝片などがその主なるものである。

石庵丁形石器(26) 12×6.5cmほどの長方形をなす砂岩の板状石を使用している。刃部は5~10mmほどで両刃をなす。短辺は整形のためであろうが、抉り込むように剝離されている。同様の例は大正14年の調査の時も発見されている。半月形を呈し無孔のもので、片刃となっている。^{鉢12} ^{鉢13} ^{鉢14} また、ヌカシ遺跡、草野貝塚、若宮遺跡でも検出されている。

石核(27) 安山岩製で、周縁より剝片を剥取し、その後折断し再び折断面を打面として利用したもので打点を残す。背面右縁には、折断前の刃部を残し、残核を利用した搔器として機能したものと考えられる。



第24図 C区III層出土石器(1/2)

石鏟 (28) 砂岩扁平凧を半割して抉りを入れたものである。未使用であり、潰れなどはまったく看取できない。

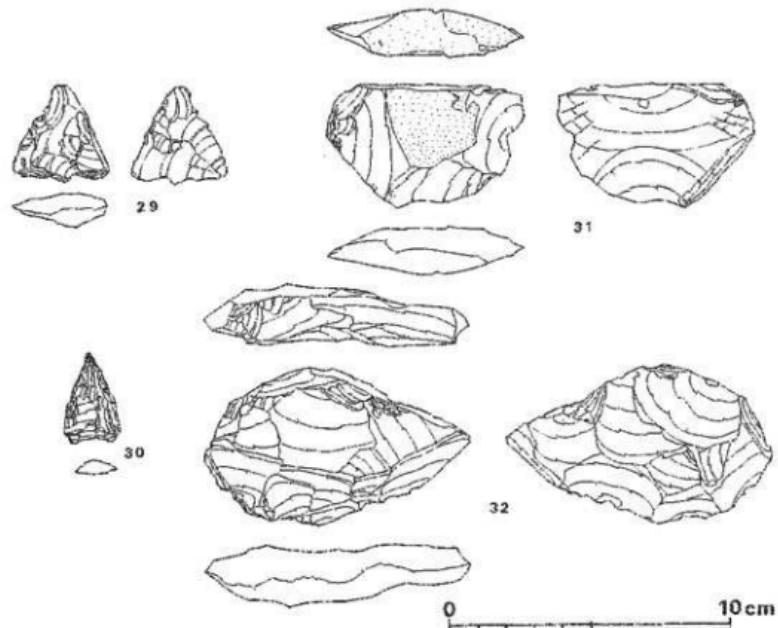
● C区IV層出土石器 (第25図、図版6)

擦器、石鏟、石核、剥片類を出土したが、輝石安山岩が半数を占めている。

擦器 (29) 斑文の入る黒曜石を素材としている。正面は周縁より調整を施し、僅かに素材面を残している。一見して石鏟のような感を受けるが背面の調整は荒く施されている。1辺を刃部として作出す。剝離は背面からのみ行う。右縁は折断されており、この折断面を打面として背面に1枚の剝離痕がある。この石器は被熱しており、全体に細かい亀裂が走る。

石鏟 (30) 安山岩製剥片を素材にしており、正面は全体におよぶ調整剝離を行なうが、背面は僅かに調整するのみである。先端部は入念に加工している。基部に長い抉りをもつ。重さ3g。

石核 (31・32) 共に安山岩製。31は大きく剥出された剥片を利用したもので、周縁より剝離しており、線状をなす打面である。正面左縁、背面右縁に調整痕を認める。正面と上面打面部に自然面を残す。32は握持のような形状の石核である。周縁から剝取しているが不規則である。平坦な打面を一部有するが、その多くは線状となっている。この石核から剥取される剥片



第25図 C区IV層出土石器(1 / 2)

は大きいもので幅4cm、長さ3cm前後の横広のものである。

● D区I層出土石器（第26図～第27図、図版7）

搔器、石鏟、石核、石錐など多様な石器の出土を見た。

搔器（33～35、38） 33～35は安山岩、38は黒曜石である。33は横広の大形剥片を素材としており、下縁に刃部を作っている。正面からの施刃と背面からの施刃をしている。左側縁に自然面を残す。かなり大形の石核から剥取されたものである。34も大形の剥片を利用しておらず、打面部は除去されている。下縁に背面より剥離して刃部を作る。また周縁にも剥離痕を残す。35は残核を利用したもので下縁に分厚い刃部を作っている。38は上下に打面をもつ石核から剥取された縦長剥片を素材としたもので、両側縁に背面より施刃している。

石錐（36・37） 36は安山岩製で素材面を僅かに留める。周縁より丁寧に調整剥離が施され、基部は抉り込んでいる。先端を欠損。重さ1gである。37は剥片錐である。素材の形状を巧妙に利用したもので、剥片の縁辺がそのまま刃部となっている。左脚は背面から正面の加筆で折損している。重さ0.4g。

石核（39・40） 共に漆黒色を呈する良質の黒曜石製である。39は角錐を素材としたもので、上下・左右から剥離を行っている。上面には自然面を留める。40は残核に近いもので39同様の剥離を行っている。この両者は打面を作らず、線状の打面から剥取する共通点をもつ。

石ノミ（41） 蛇紋岩を素材としており、頭部を折損している。刃部は片刃となり、所謂ノミとしての機能をもつものである。断面は略六角形を呈している。刃部には使用による線状痕と刃こぼれが看取される。

石斧未製品（42・43） 両者とも蛇紋岩製である。荒削り、細調整段階のもので、研磨するまでには至っていない。

砾器（44） 鳥石安山岩の扁平砾を素材とし、背面より剥離して刃部を作出する。重量は385gを計る。

円錐状石製品（45） 灰緑色の結晶片岩を薄く削り、周縁を円盤状にして成形したものである。前出25に相似する。

不明石器（46） 灰緑色の結晶片岩を素材としている。周縁は丸く削られており、上位の方は少し欠損している。用途不明の石器である。

石錐（47～49） 各々2か所に抉りを有するもので、47は結晶片岩、48は鳥石安山岩、49は砂岩を素材にしている。重量は47が280g、48が270g、49が175gを計る。

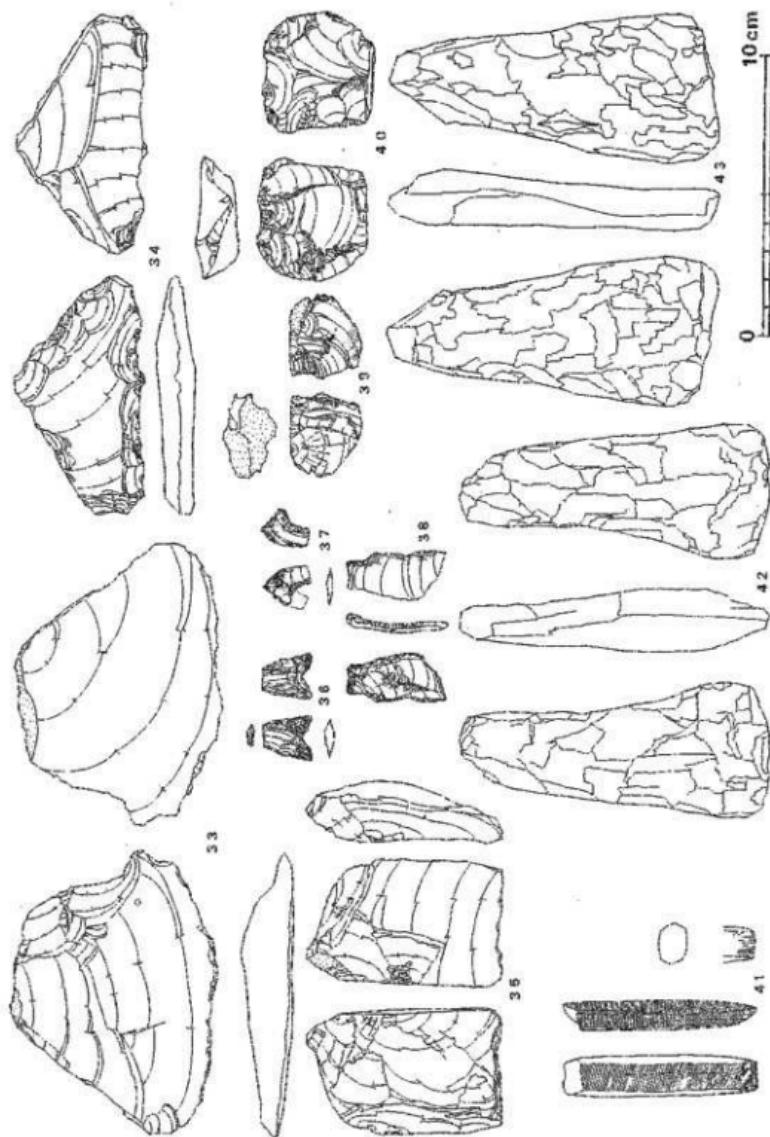
● D区II層出土石器（第28図～第30図、図版7）

搔器、石核、石鏟、石錐、石ノミ、浮子、石皿など多種類の石器を出土している。

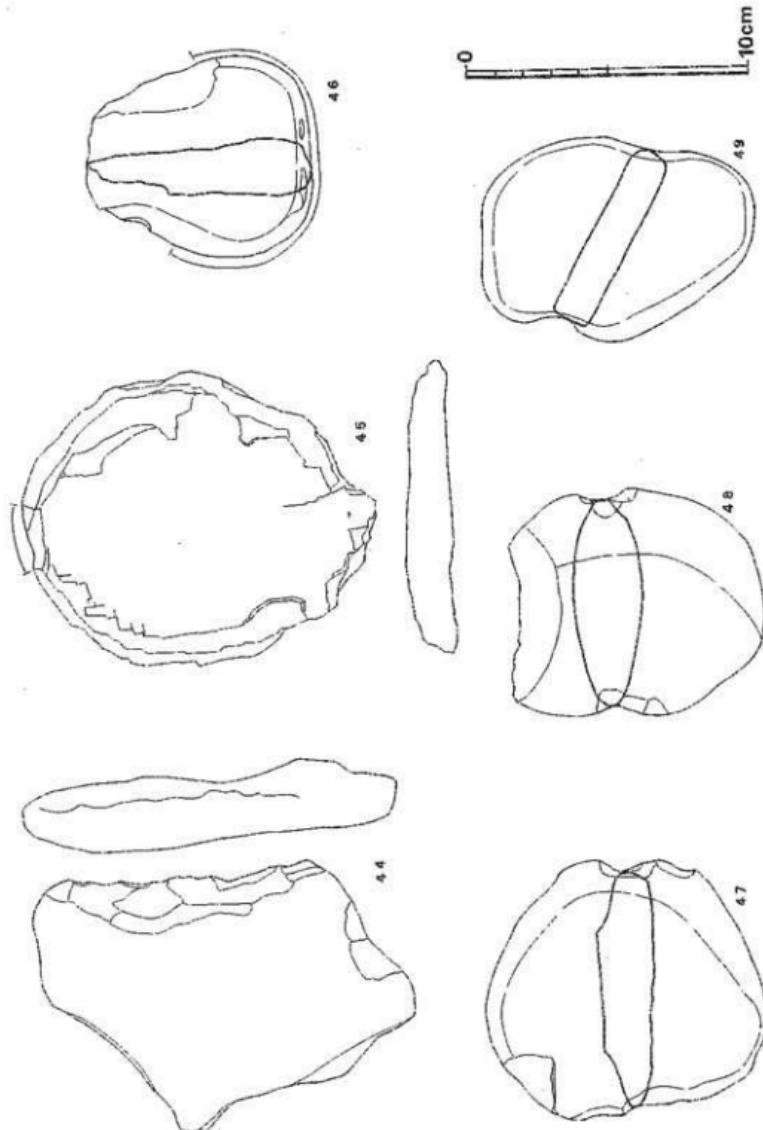
搔器（50～61） 50は大きく打面を残す剥片を素材とし、下縁に背面からの剥離で施刃している。51は縦長の剥片を横位に使用し、両面に施刃している。ために刃部は網の刃のようにジグザグ状を呈する。一部に自然面を残す。52は正面と背面から分厚く施刃したもの。折断面に

0 10cm

第26圖 D區1層出土石器(1/2)



第27图 D区1层出土石器(1 / 2)



も調整を加えている。53は多孔質の横広な剝片を素材としており、2か所に施刃する。下縁の刃部は背面から、左側縁の刃部は両面から施刃。54は下縁に背面から施刃。55は残核を利用したもので、背面から施刃。背面には3枚の剝離面を残す。打面は自然面を留める。56は横影の石匙状をなし、両縁より調整している。風化がかなり進んでいる。57は上下に打面をもつ石核から得られた縦長剝片を利用しておらず、左側縁に両面或は背面から調整を行い、刃溝し加工のような形状をなす。また右側縁は鋭い刃部をなし、刃こぼれが認められる。刀器とした方が適當かも知れない。58は分厚い縦長剝片を素材としたもので、左側縁に僅かに施刃している。59は両面より施刃しており、折断面を有する。60は残核を利用し、下縁に施刃を両面より行う。61は縦長剝片を素材にし、両側縁に背面から施刃している。これらのうち安山岩は50~56、59~60、黒曜石は57~58・61である。

石核（62~65） 62は上下・左右に打面をもつもの。63も上下・左右に打面を転移して剝片を剥取るもので、剝離面が即ち打面となる多打面をなす石核である。よって形状は大きな剝片が効率よく剥取できるように四角形をなしている。64は上下に縦状の打面をもち、右側縁の折断面をも打面としている。左側縁にも折断面を有する。65は角礫を素材として3面に打面を有するものである。62~64は安山岩、65は黒曜石である。

使用痕のある剝片（67~69） 3点共良質の黒曜石である。すべて縦長の剝片で片縁もしくは両縁に刃こぼれが見られる。

石鎚（70~74） 70は縦長の剝片を素材とし、先端に入念な加工を施して錐部を作出している。71は両側縁に刃溝し加工を行い、先端に錐部を作出する。72は幅広の剝片を利用して先端に断面三角形状の錐部を作り出している。以上はすべて安山岩製である。73・74は蛇紋岩の剝片を素材としたもので、先端に三角形状の錐部を作り出している。

二次加工石器（75~77） 共に安山岩を使用。75は側縁に機器の刃部を作出するが、上縁に数回の加擊をし、下縁にも看取され、かつ影刃面のような剝離面をもつため、この項に入れることとした。76は石核か、とも考えられるが上・下縁に何回もの調整を行っており、明確な器種分類ができないため、この項に入れた。77も同様の加工痕を上縁にもっている。これらは、復的機能を具備させた石器であろうか。

石鎚（78・79） 共に輝石安山岩製で両者共長軸に沿うように抉りを入れている。78が90g、79が240gを計る。

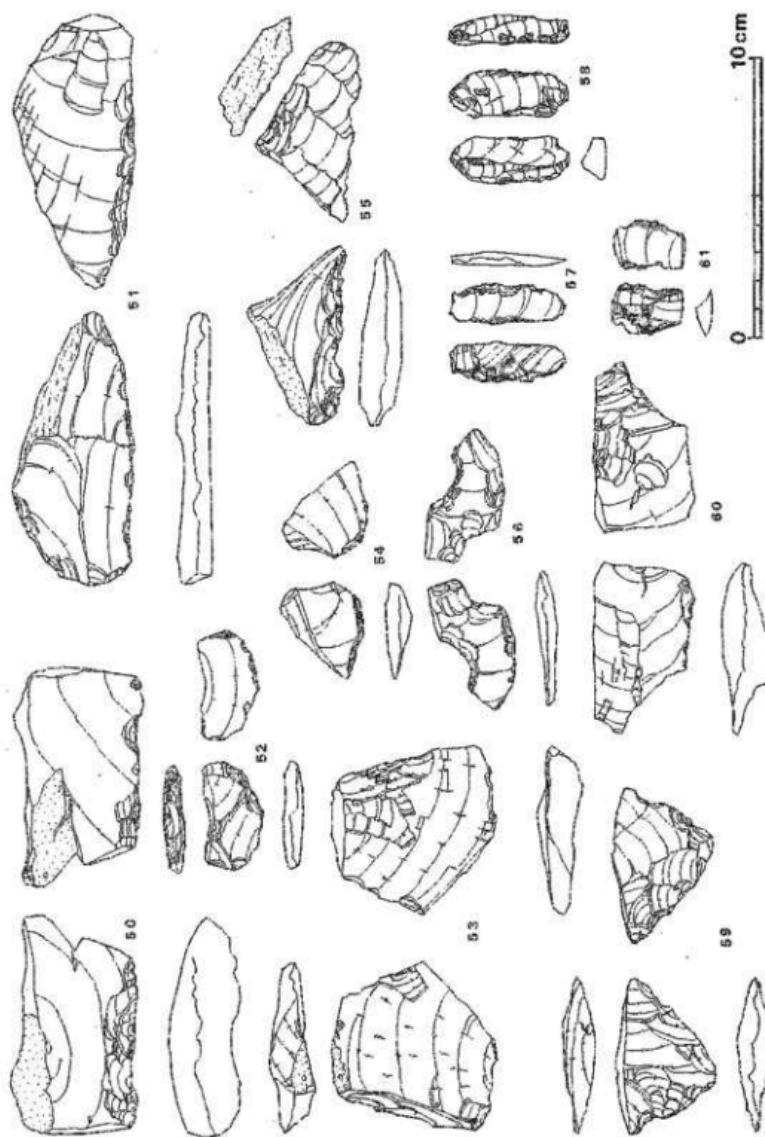
石ノミ（80） 蛇紋岩製で頭部を欠損している。41と比較すると細身で、断面梯形をなす点が異なる。刃部に若干刃こぼれが看取される。

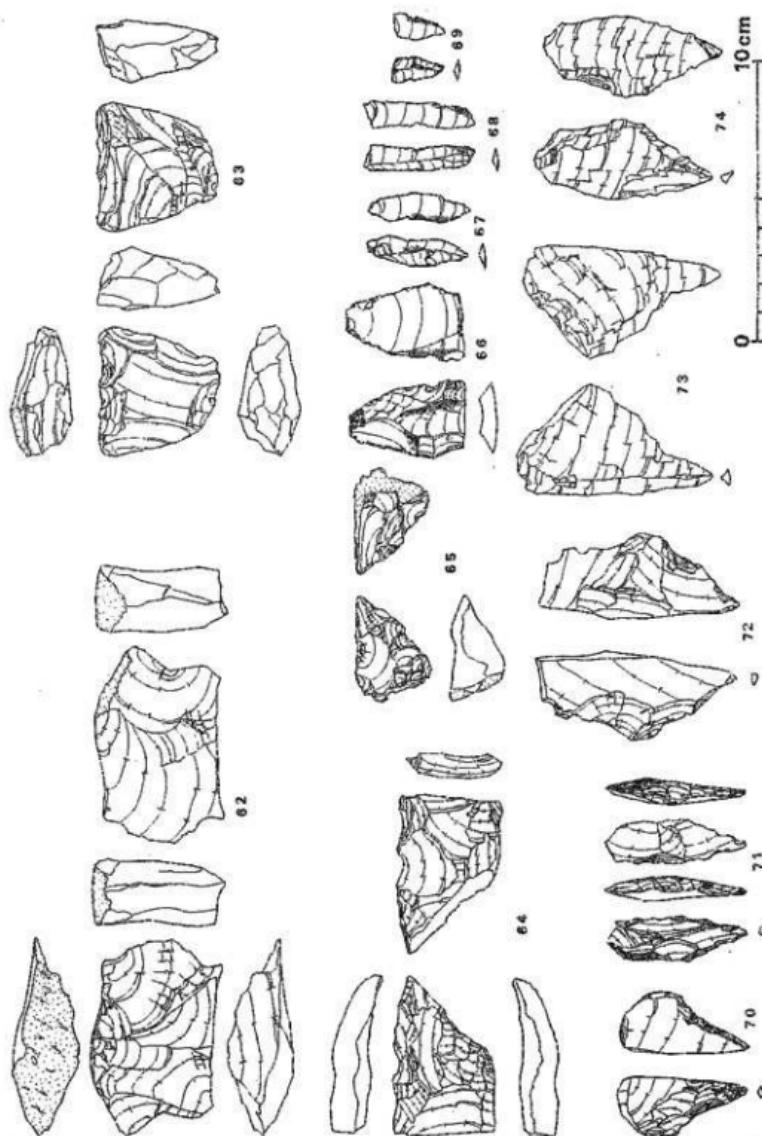
不明石器（81） 結晶片岩製で周縁は敲打により潰している。用途は不明である。

浮子（83） 16×11cmほどの軽石製浮子で、漁網に使用するものであろう。

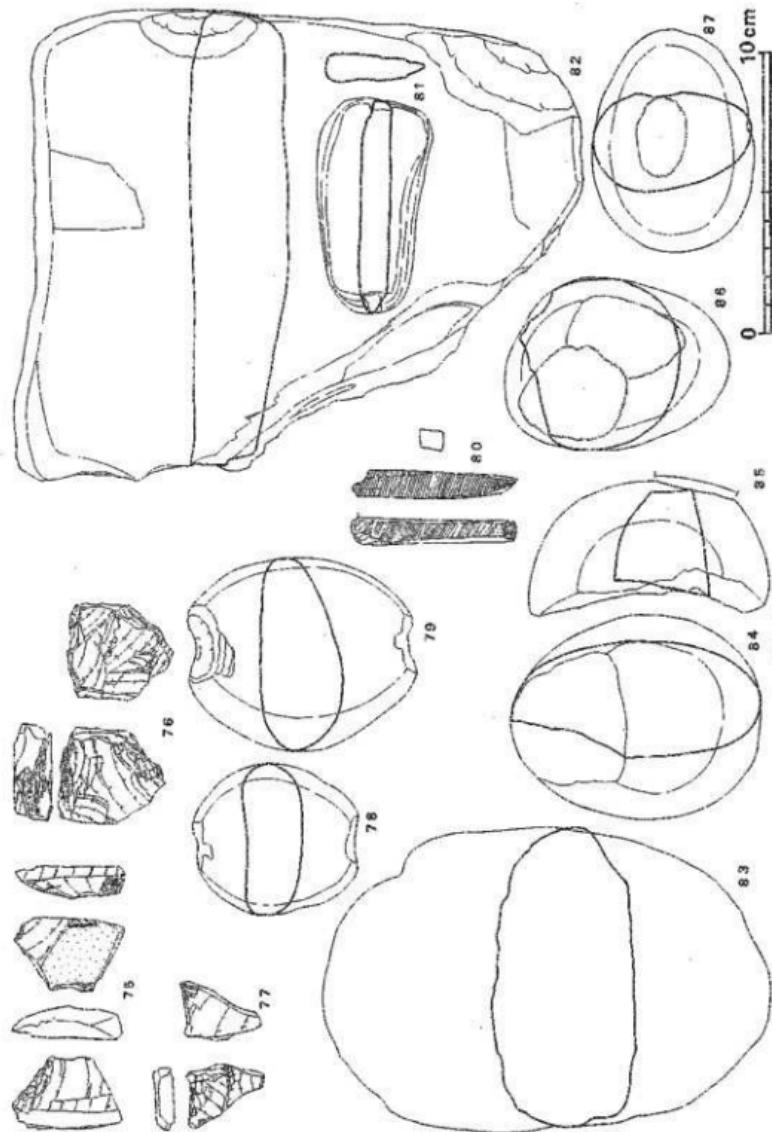
打割痕のある櫛（84・85・86） 共に輝石安山岩製で、84は1か所が打割され、また85は半剝品で、一部に敲打痕をもつ。86は2つの打割痕を有している。

第21圖 D區II層出土石器(1/2)

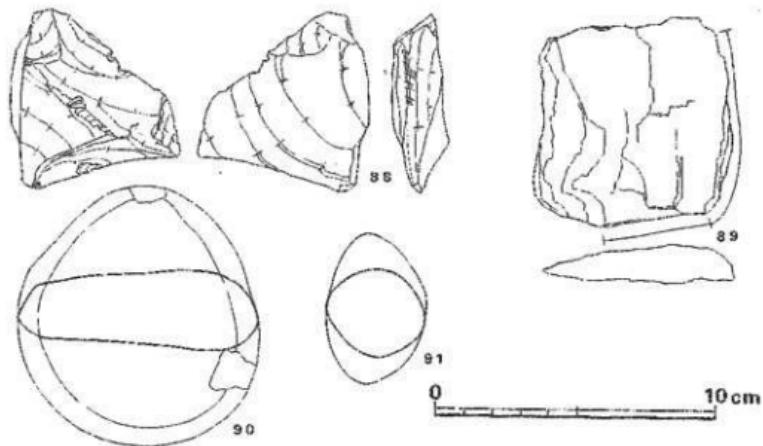




新石器 口区 II 层出土石器(1/2)



- 凹石 (87) 輝石安山岩を使用し、ほぼ中央に 3×2 cmほどの凹みがある。
- 石皿 (82) 輝石安山岩製で、中央部が周縁よりも、少し凹んでいる。
- D区III層およびPit出土石器 (第31図、図版7)
- 剝片 (88) 安山岩製で、左縁は折断面をもっている。III層出土。
- 不明石器 (89) 緑色の結晶片岩で、右・下縁を欠す。用途不明。110 gを計る。Pit出土。
- 石錘 (90) 輝石安山岩扁平円錐を使用し、3か所に浅い敲打痕がある。330 g。III層出土。
- 投弾 (91) 略球形をなすので、輝石安山岩である。重さ90 g。III層出土。
- 註12 板田邦洋 「対馬スカシにおける縄文時代中期文化」 『別府大学考古学研究室報告』 第1種 1978
 13 河口真徳 前掲註9に同じ
 14 河口真徳 「鹿児島のおいたち」先史時代 『河口真徳先生古稀記念著作集』所収 1981



第31図 D区III・Pit出土石器(1/2)